

- 私でさせも、ものを購入する場合、まず値段とその品質と性能をみます。出願特許とか、だれが苦勞して造ったとか、どこの国の生産であるかなどを、まったく確かめる事もなく、私も安くていいものを好んで購入します。

お客様にはあまり、だれが苦勞して造ったとか、どこの国の生産であるとかは、まったく問題になりません。

- 今、日本で半導体電子産業のあり方、その存在価値、戦略的な価値が日本政府レベルで見直しされ始めました。

半導体電子部品は産業のコメとして、「お米」と同じく、自国で大切に造り、自分たちの食べるお米は最高の品質のお米として育て、おいしく大切に食べる。半導体電子部品も日本の産業のコメとして、大切に自国で育て使うことの重要性を、政府も認識しはじめたと思われまます。その覚悟をぜひ実行し通してほしいところです。

- もと日立の専務で、その後、ソニーの出井社長のお誘いを受けて、ソニーの専務して来られた牧本次生さんは2006年11月20日に「一国の盛衰は半導体にある」という本を出版されました。

- 実は、ICの発明は、米国TI社の Jack Kilby の1957年7月24日の発明特許である「半導体部品間を接続するために細い金属線でbondingする」というアイデアが始まりか？ それとも、当時 Fairchild 社のRobert Noyce の1959年1月23日の発明特許である「半導体部品間の総合結線を基板に蒸着された薄膜で行う」というアイデアであるのか？ この2件の出願特許が当時長い間、世界の半導体業界では論点になっていました。

- 牧本次生さんの著書の中の96ページには、この「ICの発明者はキルビーかノイズか？」といく課題にふれています。工業調査会出版（ISBN4-7693-6172-6 ¥1900E）、2006年11月20日。